

時、漁るように読んだのを鮮明に憶えている。期待通り、件の疑問への解答は得られた。が、それだけであった。

しかし、約18年が経過して、今一度読み返すと、そういった研究も故人となった著者の卓越した人間力があったからこそ成就できたのだと会得した。このことこそ、評者は参考にすべきであったと痛感している（間に合わないが…）。まあ、要するに、同じ本であっても、読み手の変化（この場合、老化、だが）により、奥にある別のものを感じ取ることができるということだ。そういう貴重な経験をしたのも、本書のおかげである。

さて、本書の本文は、次のような四つの章で構成されていた；第1章 雪男とカワイルカ、第2章 川に生きるイルカたち、第3章 イルカの脳に魅せられて、第4章 カワイルカとの共生をめざして。特に、第1章はキャッチーな章題に見えるだろうが、なぜ、そうなったのかはご自身で確かめてほしい。

もちろん、研究自体は進歩する。本書のような鯨類研究における約20年間の進展・変遷による完璧な補遺は、巻末「解題」にて成就された。したがって、純粋な鯨類学の情報として活用しつつ、前述した人間模様染のタペストリーを堪能してほしい。その補遺で注目された現象が、「海に本拠を持つ」イルカ類とカワイルカ類の「共生」についての論考である（解題29）。これが、実は、競争ではないかというご指摘（示唆）は、実に刺激的であった。更なる研究を期待したいところだが、カワイルカ類における深刻な状況はそれを許すかどうか。本書に触発され、研究と保全をバランスよく備えた人材の登場を切に期待したい。



### 『川に生きるイルカたち 増補版』

神谷敏郎 著 粕谷俊雄 解題

2022年5月（初版2004年4月）

東京大学出版会 発行

256頁

定価4,400円（本体4,000円＋税）

浅川満彦（酪農学園大学）

本書は淡水イルカ類のほぼ全ての種について、現地の生息状況を調査し（第1および2章）、保全（第4章）への道筋をつけた記録を縦糸に、それらイルカ類の視覚・聴覚・知能・繁殖などの比較解剖学および進化生物学的な研究（第3章）という横糸を折り込んだ織物のようだった。そして、その織物の上に、見事な意匠としてその一連の活動に関わる人々のトラブル・交渉にともなう苦勞（でも、とても楽しそうに描かれていたが）を描いたタペストリーに例えられよう。

たとえば、40代半ばまで、評者は、理解不足からハクジラ類頭蓋骨の形態の非対象性となった至近／究極要因を上手く説明できなかった。ただ、カワイルカ類が鯨類の系統関係において比較的古い系統である点は辛うじて知っていたので、この初版が出た